



オーストラリアの中国専門誌

中嶋嶺雄

東京外国語大学教授

創刊された中国専門誌

最近、オーストラリアで現代中国問題専用誌『The Australian Journal of Chinese Affairs』が創刊された。この雑誌は、オーストラリア国立大学（ANU）現代中国センターが、このセンターのヘッドであるステイブン・フィッツジェラルド氏を編集長として年2回刊行するものである。送られてきた創刊号を手にとってみると、なかなかの出来ばえであり、いかにも現代中国研究が発展の途上にあるこの国の意欲を十分に感じさせる。私自身の「朝鮮戦争と中ソ対立」についての論文も出ているので、いささか手前ミンになるのかもしれないが、国際的にみても、このような中国問題の英文専門誌は数少ないだけに、将来の発展が大いに期待されるところである。

中国問題の英文専門誌として有名な雑誌には、ロンドン大学現代中国研究所から出ている『The China Quarterly』があるが、今回のオーストラリアの雑誌は、その体裁といふ、内容といふ、明らかに右の先行誌を意識しつつ、それと張り合おうとする様子がかがえるのが面白い。

リックマン氏への誤解

私は昨秋まで一年間、ANUの現代中国センターにおいて、この新しい雑誌の創刊準備過程を見てきたが、いまやアジアの国家として再生しようとしているオーストラリアからす

れば、イギリスの中国研究はもはや斜陽化し、アメリカもオーストラリアほど中国と近くはないのだから（アメリカはいかに米中接近しようとも、アジアの国ではない）、オーストラリアこそ、単に南半球のみならず英語圏全体の中国研究の新しいワールド・センターになりうるのだ、という意気込みが横溢していた。たしかに、オーストラリアの現代中国研究は、最近とみに活発になりつつあるし、オーストラリア国立大学では毎週いくつかの中国関係のセミナーが開かれていて、論争も活発に行われている。昨秋は、「中国の人権」に関して、先のフィッツジェラルド氏と同大学中国学科のピエール・リックマン氏の間で大論争があつて、セミナー教室はいっぱいになった。

フィッツジェラルド氏は、ホイットラム労働党政権が誕生したとき、34歳の若さで初代中国大使に抜擢され、つい最近はまだANUにおける大学教師の職を辞して兼中貿易のコンサルタントになるといふ行動的な逸材であるが、どちらかかというところ親北京である。

ピエール・リックマン氏は、実は、シモン・レイというペンネームで「ニューズ・ウィーク」に当時寄稿するなど広く世界に知られている中国評論家である。氏がしばしばフランスのノン・マオイストのグループと協同しているために、わが国ではフランスの中国研究者だと間違つて伝えられ、最近邦訳された氏の新著『中国の影』でも訳者が誤つてそのように紹介しているが、氏は本来はベルギー人であり、このところずっとオーストラリア国

立大学で教授をとっている中堅である。

二人のフィッツジェラルド氏

間違つて伝えられている例として、もう一つ記すると、オーストラリアには先のフィッツジェラルド氏とは違うもう一人の著名な碩学C・P・フィッツジェラルド氏がいます。氏はある。氏はアメリカのハーバード大学の長老（最近、退職）ジョン・K・フェアバンク氏がアメリカにおいてそうであつたように、オーストラリアの現代中国学の開祖であり、名著『Revolution in China (1952)』

ほか数々の著作があるが、現在はオーストラリア国立大学名誉教授である。したがつて、オーストラリアの中国研究者はほとんどC・P・フィッツジェラルド氏の教えを受けたといつてもよいであろうが、一般的にはフィッツジェラルドという姓がそつやたらにはないためか、わが国では二人のフィッツジェラルド

ホイットラム・オーストラリア前首相



ド氏がしばしば混同もしくは同一視されている。そうでない場合でも、ステイブン・フィッツジェラルド氏はこの碩学の息子だろうとよく間違われている。年齢的にはちょうど親子の年齢でもあるので、そうした誤解が生じやすいかもしれないが、両者は血縁関係はまったくない。

しかし、よく注意してみると、若いフィッツジェラルド氏のほうはStephen FitzgeraldとGを大文字で表示するのに対して、老フィッツジェラルド氏はFitzgeraldである。なぜGを大文字で表示するのか、一度聞いてみようと思つていてその機会を逸してしまつたけれど、前中国大使のこの活動的な私の同僚はオーストラリア人でもタスマニア島の出身であり、アイルランド系移民の流れを汲むという。そういうえば、タスマニアの州都ホバートにはフィッツジェラルドという大きなデパートがあつた。

さて、オーストラリア国立大学は、その主体がいわば大学院大学であることを大きな特色としており、現代中国センターもResearch School of Pacific Studies（太平洋地域研究大学院）の一機関であるが、きわめて国際色が豊かであると同時に大変「開かれた大学」である。最近では、ホイットラム前首相も、この客員教授となつて話題を呼んだばかりである。

ところで、この大学の博士候補の大学院生として、昨年、現代中国文芸を専攻するも一人のジョン・フィッツジェラルド君が入つてきた。そして、まさに老・中・青のフィッツジェラルド三代がいずれもANUの中国研究者なのだが、同君も血縁関係はいずれとも持っていない。同君には、小さな息子が生まれたので、やがて将来は四代のフィッツジェラルド氏がオーストラリアの中国研究を担うことになる可能性が存在している。▲▲

共同通信